

第7回消費者法制度のパラダイムシフトに関する専門調査会

「ケアの倫理」と消費者としての人

2024年6月25日

池田弘乃（山形大学）

1、ケアの倫理という「もう一つの声」

[安井2023]、[岡野2024]

- ・ローレンス・コールバーグによる道徳性の発達理論 [コールバーグ 1987]

I 慣習以前の段階	1 罰を避けるための服従
	2 道具としての取引（あなたがこうしてくれたら、私もそうしてあげる）
II 慣習的道徳の段階	3 対人関係の調和・良い子志向（多数意見や紋切り型の行動に従うことで他人から承認を得る）
	4 法と秩序を志向（既存の社会秩序を秩序そのもののために維持すること）
III 慣習的道徳以後の段階	5 社会契約に基づく義務の履行（自由意志のもとづく合意と契約が人を拘束する義務の源となる）
	6 普遍的原理に基づく判断

• ハイイツのディレンマ [ギリガン2022、99頁以下]、[神崎2006]

ハイイツには瀕死の配偶者がいる。助けるための唯一の手段は、近所の薬屋が発見した新薬だった。それは非常に高価でハイイツにはその購入費用を捻出することができない。ハイイツによる値下げ交渉は不調に終わる。ハイイツはこの薬を盗んでも配偶者を助けるべきか。

11歳のジェイク：所有の価値と生命の価値との衝突の問題として整理。

11歳のエイミー：人間に応用された数学の問題ではなく、長期的な関係性の話として受け取り、関係性におけるコミュニケーションを通じて同意に至ろうとする。

エイミーは「劣った」発達段階にいるのではなく、**「もう一つの声」**で語っていたのでは？ (*In a Different Voice*, 1982)

- 〈何が正義にかなうか〉という問いではなく、〈他者のニーズにどのように応答すべきか〉という問いにこだわる [川本2005]

- 階層構造と網(web)という2種類の人間関係

- 自己と他者は同等の真価を有し、力の違いにかかわらず公正に扱われるという理想

独立した一人ひとりが平等な存在として構成するものとして社会。

- **すべての人が他人から応えてもらえ、受け入れられ、取り残されたり傷つけられる者は誰ひとり存在しないという理想** [ギリガン2022、173-174]

個別の具体的な一人ひとりが互いに抱く関心や彼らの現実の交流から出発してその関係性の網の目がどこまでも尽きることなく広がっていくものとしての社会。

・ギリガンによるケア的態度の成熟 [ギリガン2022、第5章]

①利己的な個人の生存の重視

②他者への責任の意識

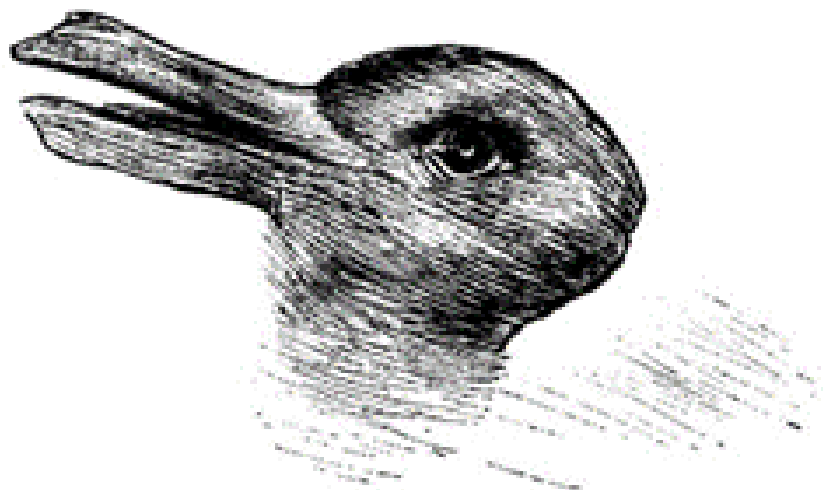
自己犠牲，期待される社会的役割への順応

③他者と共に自己の欲求をも見据える

自己のニーズと他者へのケアの統合

役割期待をも相対化しつつ，「他者も自分も傷つけるな」という普遍的な倫理の追求へ。

- 正義の倫理とケアの倫理の「結婚」 (marriage) ?
- **それとも「反転図形」** ? [ギリガン2014]



Raninchen und Ente.

(Wikimedia Commonsより)

2、ケアの倫理から消費者の法へ

- ・人間の条件としての消費（者）？

人の一生のなかで、「自立」した成年期をはさむ「出生～被養育」期と「老い～死亡」期の意味

：事業者に対する消費者ではなく、生産者に対する消費者としての人間

※人間存在につきまとうケアについては、ヒギヌス（ヒュギーヌス）によるCuraの寓話に着目する [ハイデガー2013、412頁以下] 参照。

- ・人間の脆弱性に応答する国家（responsive state）という構想 [Fineman 2013]

•脆弱性の諸相 [Mackenzie2014]

➤普遍的な脆弱性 不可避の依存 →そのケアをする者の派生的依存

➤状況による脆弱性

➤脆弱さへの対処がさらに脆弱さを生む可能性 (**pathogenic vulnerability**)

e.g. 介入が対象者の自律を掘り崩し無力感を悪化させる、セルフネグレクト。

※vulnerabilityについては、「攻撃誘発性」という訳語もあることに注目する [大川2018] も参照。

- 自律観の再編

自立的ではないが（＝依存的だが）自律的な生の模索

→社会関係の中での自律（**関係的自律**）。自律性を個々人の孤立した能力とは考えず、どのような社会関係の中にあるかに左右されるものとする発想。相互依存を生きる中で、「自分の人生が自分のものであること」をいかに保障するか。 Cf. [富岡2022]

- ケアする人へのケア

脆弱な人（その庇護下にあるさらに脆弱な人）

↑

ケア提供者（に生ずる脆弱性）

- ・フェミニズム法理論の問いかけ

「健常な成年男性」＝独立して自立した存在というフィクションを支える様々な便宜（accommodation）。

このフィクションは、「ケアレスマン」にケアを提供する者がいることで成り立っている。「ケアレスマン」モデルを取り続ける限り、「産む身体」と「働く身体」の間には衝突や葛藤。〔浅倉2018〕

※人間一般の問題としてケアを考えると、歴史的現実としてのケアの担い手の偏りについて無視、軽視しないこと。（ケア論の「横領」の危険） 〔ケア・コレクティヴ2021〕

- ケア基底的社会 [池田2022]

- コストとしてのケア：ケアなくして存続しえない社会 → コストの公正な分担の探究

- 価値としてのケア：ケアがあるからこそ存続に値する社会 → 価値の内実の探究

- 一つの糸口として、ケアの受け手は「なにもしていないようにみえて」なにかをしているという感受性の涵養。

[六車2012] [村瀬2022]

- ケア関係の価値を「社会」の中でどれだけ共有できるか
政治制度や他の社会制度がなすべきことは、一定の善を人々に促すことではなく、様々な善の探究が保障される条件を整備すること。
(反卓越主義。パターンリズムへの一定の警戒)
- ケア基底的社会とは、ケアを考えることから出発する社会、あるいはケアを考え続けることによって営まれていく社会。そのために、**ケアせざるを得ない状況が放置されることによって、ケアの価値を考えることが阻まれる事態は何としても避けようとする社会。**

- 2段構えのケア

- ✓結果としてのケア行為、規制措置、施策、配慮

- ✓そこに至るプロセスにおけるケア（「これこれこういう訳で、こういう形で「よりよい」選択肢状況となるよう規制する」等々を可視化し、共有する。何をどう配慮していくかを社会で討論し、共有する。）

- 卓越主義の問題について：善の「客観的リスト」の危うさ

- 自立的でない者、理性的でない者に「聞く」アプローチの可能性と限界

- 自由で自律的な選択（意思）の確保と客観的価値実現のバランスを図る規律とは？

：「客観的価値」の候補についてのたえざる吟味・再吟味の過程をいかに保障するか。

→ケアを受ける者たち、ケアを与える者たちの時間（の流れ方）に沿った検討

客観的価値について、ケアの直接の受け手～与え手だけでなく、社会として共有することが大事になってくる。

3、まとまらないまとめ

- 権利間の衝突問題としてではなく、責任の間の葛藤に直面し、一刀両断の解決ではなく、対話の中で問題を解きほぐす営みとしての「ケアの倫理」
- ケアの政治、ケアの社会制度はケアの倫理の不可欠の考察分野。
[トロントら2020]
- **脆弱性の普遍性。人はみな脆弱である／脆弱になりうる。**
「衰え」を遠ざけることに執心する社会は、持続可能か？
「巻き戻せる」社会へ？

参考文献

- 浅倉むつ子（2018）「「女性中心アプローチ」への誘い——浅倉むつ子『労働とジェンダーの法律学』（有斐閣、2000年）をめぐって」、東海ジェンダー研究所『ジェンダー研究』20号3-22頁
- 池田弘乃（2022）『ケアへの法哲学：フェミニズム法理論との対話』ナカニシヤ出版
- 大川正彦「労働と政治の〈現在〉史にむけて：模擬授業「喰う・寝る・遊ぶの政治経済学」の再演とその振り返りをとおして」、『Quadrante』20号175-186頁
- 岡野八代（2024）『ケアの倫理：フェミニズムの政治思想』岩波新書
- 川本隆史（2005）「《ケアの社会倫理学》への招待：ケアと社会のインターフェイスを点検する」、同編『ケアの社会倫理学：医療・看護・介護・教育をつなぐ』有斐閣、1-45頁
- 神崎繁（2006）「ディレンマ集」、大庭健ほか編『現代倫理学事典』弘文堂、901-914頁
- ギリガン、キャロル（2014）「道徳の方向性と道徳的発達」、小西真理子訳、『生存学』7号229-244頁
- ギリガン、キャロル（2022）『もうひとつの声で：心理学の理論とケアの倫理』、川本隆史・山辺恵理子・米典子訳、風行社（Carol Gilligan, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development* with a new Preface, Harvard University Press, 1993〔first published in 1982〕.）
- ケア・コレクティブ（2021）『ケア宣言：相互依存の政治へ』、岡野八代・富岡薫・武田宏子訳、大月書店

コールバーグ、ローレンス&ヒギンズ、アン（1987）『道徳性の発達と道徳教育』、岩佐信道訳、広池学園出版部

富岡薫（2022）「抑圧への抵抗としての関係的自律：性と生殖を巡るフェミニズムの運動に立ち返る」、『生命倫理』32巻1号68-75頁

トロント、ジョアン（2020）『ケアするのは誰か？：新しい民主主義のかたちへ』、岡野八代訳・著、白澤社

ハイデガー（2013）『存在と時間 2』、熊野純彦訳、岩波文庫

六車由美（2012）『驚きの介護民俗学』医学書院

村瀬孝生（2022）『シンクロと自由』医学書院

安井絢子（2023）「ケアの倫理：〈そのものらしさ〉を受容する倫理」、神崎宣次・佐藤静・寺本剛編『3STEPシリーズ5 倫理学』、昭和堂、69-84頁

Fineman, Martha Albertson (2013), “Equality, Autonomy, and the Vulnerable Subject in Law and Politics” in Fineman and Grear eds. *Vulnerability: Reflections on a New Ethical Foundation for Law and Politics*, Routledge, pp. 13-27.

Mackenzie, C. (2014), “The Importance of Relational Autonomy and Capabilities for and Ethics of Vulnerability” in Mackenzie et al. eds. *Vulnerability: New Essays in Ethics and Feminist Philosophy*, Oxford University Press, pp. 33-59.